

研究種目： 基盤研究(C)  
研究期間： 2006～2008  
課題番号： 18520253  
研究課題名(和文) ボーダーを超越するマイノリティ・ディスコース  
研究課題名(英文) Minority Discourse Transcending Borders  
研究代表者  
森 あおい (MORI AOI)  
広島女学院大学・文学部英米言語文化学科・教授  
研究者番号：50299286

研究成果の概要:本研究では、メインストリーム社会から無視され、沈黙を強いられてきた人々の社会・文化表象を考察し、再評価することで、権威主義に対抗するマイノリティ・ディスコースの理論を構築することを目的とし、社会的に周縁化されてきた人々の存在を回復し、多様な価値観の上に成り立つ、他者を受け入れる寛容な社会を実現する可能性を明らかにした。

## 交付額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	480,000	3,280,000

研究分野:人文学

科研費の分科・細目:文学・英米・英語圏文化

キーワード:英米文学、ジェンダー、多文化主義

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの日本における英米文学研究では、白人中心の文学的コンテクストにおいてのみ作品研究が行われることが多かった。しかし、アフリカ系アメリカ人、カリブ系、アジア系など、いわゆる欧米ではマイノリティとみなされているエスニック・グループの文学作品は、メインストリーム社会から注目されることは少なかったものの、排他的な社会への警告を発してきた。これらの作品に含まれている様々な現代社会批判(ポストコロニ

アル的な状況を引き起こす資本主義国家のグローバリゼーション政策、産業化に伴う環境破壊、陰で操る父権制等)を読み解き、西洋至上主義から解放された理論を構築することが、他者との共存が可能な社会を維持するためには必要不可欠であることから、本件急に着手した。

## 2. 研究の目的

本研究は、「ボーダーを超越するマイノリティ・ディスコース」というタイトルのもと、これまで周縁化され、弱体化され、抑圧されてきたマイノリティ・グループの声を集約し、差別を生み出す危険性を孕むパワー・ストラクチャーに対抗する理論を、ことに社会・文化表象に焦点を当てて展開していくことを目的とした。ことに、宗教、哲学、芸術という多角的な側面から、文学作品を研究対象とし、支配者／被抑圧者、聖／俗、男性／女性、資本家／労働者、先進国／発展途上国、若者／年長者といった二項対立に含まれる権威主義的ヒエラルキーを脱構築する手法を、地域差を越えて、すなわち、ボーダーを超越するマイノリティ・ディスコースという視点に立脚した立場で提唱したいと考えた。

さらに、本研究では、単に日本人のアメリカ文学研究者としてアメリカ文学・文化理論を「受容」するばかりでなく、日本人としての視点からアメリカ文学、ことにマイノリティ・ディスコースについて発信できる理論を構築することをめざした。

## 3. 研究の方法

メインストリーム社会から無視され、沈黙を強いられてきた人々の社会・文化表象を、下記のようにエスニシティごとに3つのカテゴリーに分けて考察した。

### (1) アジアにおけるマイノリティ・ディスコースと表象

韓国の映画、テレビドラマ、舞台芸術などに示されている韓国文化の表象を、韓国以外のアジアの国々に暮らす他者の視点から見検証する。さらに、日本で大きな話題となった韓国の人気テレビ番組、「冬ソナ」現象が日韓関係にもたらした過程を詳らかにし、「韓流」文化が作り出したアイコンを、文化的、美学的視点から考察していくことで、アジアにおけるマイノリティ・ディスコースの役割を検討しようと試みた。

### (2) カリブとアメリカのポストコロニアリズム

ポストコロニアリズム批評に関するテキストを基に、アフリカから強制的にカリブやアメリカ合衆国に移住させられた奴隷とその子孫たちのディアスポラとしての表象を読み解いた。これまでほとんど省みられてこなかった旧フランス植民地のポストコロニ

アル批評について、カリブ諸島から宗主国フランスに留学した学生たちのあいだで、1930年代から60年代にかけて起きたネグリチュード運動に注目して、検証した。さらに、エメ・セゼール、レオポルド・サンゴールなどこの運動の中心人物の影に隠れて、これまでほとんど言及されることのなかったマルティニーク出身のナーダル姉妹や、シュザンヌ・セゼールと言った女性の視点から、コロニアリズム、ジェンダー・多文化主義の表象を考察した。

### (3) アフリカ系アメリカ人のメディアにおける表象

テレビや映画などのビジュアル系の媒体に投影される、アフリカ系アメリカ人のステレオタイプ化されたイメージを分析する。ことにアフリカ系アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したトニ・モリスンの『パラダイス』に注目して、アフリカン・アメリカンの主体的な表象について研究した。

最終的には、アジア、カリブ、アメリカのそれぞれの社会でディアスポラとしての暮らしをしいられたマイノリティ・グループに共通の体験をもとにした、抑圧から解放されるディスコースを検証した。

## 4. 研究成果

### (1) アジアにおけるマイノリティ・ディスコースと表象

「韓国の波、世界的な傍観者」("Korean Wave and Global Spectators")というテーマの研究書を韓国の研究者と共同で執筆する予定であったが、そのために応募していた韓国政府研究助成金が財政上の理由から凍結されたため、完成にいたっていない。今後の課題として、アジアも視野に入れたマイノリティ・ディスコースの理論を構築していきたい。

### (2) カリブとアメリカのポストコロニアリズム

十五世紀以降、西欧で資本主義社会が誕生し、近代社会の幕が開かれた。その結果、封建社会は崩壊して、個人が社会的束縛から解放され、自我に目覚めるきっかけとなった。だがその一方で、資本主義によってもたらされた生産力の拡大は、廉価な原料や労働力の供給と新たな市場を必要とし、そのためにアメリカやカリブなどの新世界に植民地が建設されるようになった。このようにして、西

欧諸国による植民地政策が始まり、宗主国と植民地の不平等な関係が二十世紀初頭まで継続した。

十九世紀から二十世紀にかけて、このような植民地化政策に対する抵抗運動が植民地で高まってくるが、政治的、社会・文化的に一番強い影響力を持ったのが、1930年代にフランスでフランス領の西インド諸島、アフリカ出身の留学生の間で起きたネグリチュード運動である。ネグリチュードは、「黒人であること」、「黒人的特性」、「黒人精神」と訳される。その定義は複雑だが、一般には白人社会への同化を拒絶し、アフリカ出身という出自を誇りにし、アフリカの伝統的な精神性を尊ぶ運動の概念がこの名で呼ばれている。

この運動の中心人物としては、マルティニーク出身のエメ・セゼールやセネガル出身のレオポルド・サンゴールなどが挙げられる。しかし、彼らに先んじてネグリチュードの中核となる黒人精神の重要性を唱えたのは、マルティニーク出身のナルダル姉妹（七人姉妹で、特に中心となったのがジェーンとポーレット）であった。彼女たちは世界的視野において黒人文化の重要性を唱え、その後に起きる黒人文化のインターナショナルリズムの基礎を築いたのである。ナルダル姉妹が提唱した黒人精神は、その後さまざまな形で受け継がれている。

ポーレット・ナーダルは、1920年代に留学先のソルボンヌ大学で英文学を学び、当時アメリカで脚光を浴び始めていたハーレムルネッサンス期のアフリカ系アメリカ人の作品と出会う。彼らが高らかに歌う黒人としての誇りに感銘し、アフリカにルーツを持つ文化を回復することの重要性を認識したポーレットは、パリに留学していたフランスの旧植民地出身の学生に、フランス植民地主義の同化政策を拒否し、自分たち独自の文化を回復する必要性を説いた。彼女の思いは、その後刊行される、*La Revue du Monde Noir* に凝縮されている。また、ナーダル姉妹がパリの自宅で開いたサロンは、ハーレム・ルネッサンスの作家と旧フランス植民地の学生たちの貴重な交流の機会を提供し、欧米中心主義の文化に対抗するディスコースが形成される場となった。

マルティニーク出身のシュザンヌ・セゼールもこのサロンに出入りしていた学生の1人であった。シュザンヌは、ナルダル姉妹の影響を受け、植民地主義からの解放を訴える運動に積極的に関わった。その後、ネグリチュード運動のリーダーとして活躍し、マルテ

イニーク島のフォール・ド・フランス市の市長となるエメ・セゼールと結婚、故郷のマルティニークで夫とともにシュールリアリズムを広めることに尽力した。

夫らとともに発行したシュールリアリズムのレビュー誌、『トロピーク』（1941-45）では、フランス文化に影響されないマルティニーク独自のネグリチュードの文学を展開した。シュザンヌは、シュールリアリズムが、いわゆる「理性」とよばれる西洋の根拠のないロジックから黒人の精神を解放する、と考えていた。彼女は、西洋の論理の根拠となる二項対立を超越する手段として、シュールリアリズムの手法を用いたのである。

自らもシュールリアリズムの立場で執筆するが、1945年に『トロピークス』に「大いなるカモフラージュ」というエッセイを寄稿後、まるで彼女自身がカモフラージュされたかのように公の場から忽然と姿を消す。

シュザンヌは、夫がマルティニークの政治的指導者として多忙を極めていく中で、5人の子供の面倒を見ながら執筆活動を継続することは不可能であると判断し、筆を折ったと考えられる。母親としての義務感から、おそらく自ら潔く家庭に入ることを選択したのであろう。その決断を下す心境が、「グレート・カモフラージュ」に織り込まれ、さらに、彼女にとっていわば社会的活動からの幕引きとなるこのエッセイに、これまでネグリチュードやシュールリアリズム運動に関わった思いが、凝縮されている。

ネグリチュード運動に大きな貢献を果たしたナーダル姉妹、そしてシュザンヌ・セゼールが、この運動の歴史から抹殺されてしまった背景には、ジェンダーの問題があったと考えられる。この運動の影の立役者である女性の見直しを行うことで、ポストコロニアル批評がさらにマイノリティの声を代弁する手段として有効になる。

### (3) アフリカ系アメリカ人のメディアにおける表象

テレビや映画などのビジュアル系の媒体に投影されるアフリカ系アメリカ人のステレオタイプ化されたイメージが、しばしばアメリカ社会で大きな問題となってきている。そのような客体化されたイメージを塗り替え、アフリカ系アメリカ人の主体性を回復しようとする作家の一人として、トニ・モリスンが挙げられる。

トニ・モリスン（1931年、オハイオ州ロレ

イン生まれ)は、1993年にアフリカ系アメリカ人女性で初めてノーベル文学賞に輝いた、現代アメリカ文学を代表する作家である。モリスンはこれまでに八冊の小説と一冊の文学批評書を著している。デビュー作の『青い眼がほしい』(1970)から最新作『ア・マーシー』(2008)にいたるまで、一貫して人種や性差、階級の壁に阻まれて社会で抑圧されてきた人々の存在を、文学を通して回復しようと試みている。

モリスンの第五作目にあたる『ビラヴィッド』(1987)は、アメリカの人種差別の根源となった奴隷制に真っ向から取り組んでいる。奴隷制という非人間的な制度が、子どもを持つ逃亡奴隷の母親の行動と心理に及ぼす影響を、モリスンは史実を基にして想像し、人種差別が人間性を破壊する過程を主人公の内面から描き出す。

『ビラヴィッド』は、アフリカ系アメリカ人のテレビ番組の司会者として圧倒的な人気を博しているオプラ・ウィンフリーによって映画化された。さらに、モリスンと作曲家リチャード・ダニエルプアとのコラボレーションで2005年に *Margaret Garner* というタイトルでオペラ化され、デトロイトを皮切りに、シンシナティ、フィラデルフィアで上演され、好評を博している。

マイノリティ・ディスコースの多様性を示すために、この作品の映画化、オペラ化することの意義に注目した。モリスンが、作家として小説を著すだけでなく、音楽を含めた文学を超えた媒体を通して伝えようとしている芸術性について、新聞や雑誌記事などに掲載された映画やオペラのレビューを調査し、また、自ら映画とオペラを見ることで検証した。その結果、文学とは異なった映画やオペラといった形態のメディアを介して、客体化されていたアフリカ系アメリカ人のステレオタイプが修正され、主体として自らの「声」を回復する過程が明らかになった。

さらに、視覚的な媒体に投影されるアフリカ系アメリカ人のステレオタイプ化されたイメージについて、W.E.B. デュ・ボイスが関わったパリ博覧会(1900)と、トニ・モリスンが企画して開催されたルーヴル博物館での特別展(2006)を比較検討し、現代社会におけるマイノリティ・ディスコースの持つ可能性について考察した。

パリ博覧会は、19世紀の科学・産業技術の「進歩」をテーマに開催された。この博覧会で黒人展が開催され、そのための資料収集を行ったのがデュ・ボイスであった。彼は、奴

隷解放後の黒人の「プロGRESS」を写真や統計を通して提示し、否定的な黒人のイメージを修正しようとした。その成果は博覧会でも認められ、金メダルを受賞する。しかし、アメリカのメディアは、黒人プレスを除いてこの企画をほとんど無視した。パリ博覧会の企画は、アフリカ系アメリカ人が周縁化されていることを改めて対外的に知らしめるきっかけとなった。

パリ博覧会の開催から百年余りを経た2006年11月にモリスンは、アメリカ人として初めてルーヴル博物館で特別展を企画する。「外国人の家」(“Foreigner’s Home”)というテーマのもと開催された特別展に行く機会を得、モリスンの講演会に出席し、ルーヴルで提供されている資料や雑誌・新聞記事をもとに、この特別展の意義を検証した。モリスンの企画は、抑圧された者たちの存在が芸術に記録されていることを示しており、マイノリティの人々の声を明らかにするために、芸術が大きな役割を果たしていることが明らかになった。

トニ・モリスンの長編小説『パラダイス』(1999)におけるアフリカ系アメリカ人の表象に注目して、アメリカの歴史を再構築する試みに取り組み、背景に織り込まれているアフリカン・アメリカンの歴史の再構築をテーマに、奴隷制の歴史、奴隷解放とネイティヴ・アメリカンの関わり、南部復興、黒人の西部開拓、黒人のコミュニティの誕生、そして公民権運動にいたるまでの黒人の歴史がどのように『パラダイス』に反映されているのかを史実をもとに検証した。アフリカ系アメリカ人の歴史にアメリカ先住民の視点を織り込むことで、アメリカのメインストリーム社会をマイノリティ・グループの視点から見直し、差異を超越した共同体の研究を行い、その成果として『トニ・モリスン 「パラダイス」を読む』を出版した。

2008年5月には、研究協力者であるプリンストン大学 Valerie Smith 教授の来日を実現し、申請者が所属する学会(黒人研究会)で『黒人研究と平和』というテーマのもとにシンポジウムを企画し、同教授に基調講演を依頼して、アジアやアメリカ、アフリカ、そして日本の研究者を交えて議論の場を持った。また、広島女学院大学大学院で指導にあたっている大学院生にも学会に出席するように勧め、次世代の研究者にも本研究テーマであるところの「ボーダーを超越するマイノリティ・ディスコース」の意義について直に学ぶ機会を提供した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

Aoi Mori. “The Tower of Babel and the Power of Language in Toni Morrison’s *Paradise* and *Sula*,” 『言語文化論叢』9、331-350、2006、査読無し

[学会発表] (計5件)

- ① 森 あおい: 「ボーダーを超越するトニ・モリスンの歴史観と芸術性— *BeLoved* とオペラ *Margaret Garner* を中心に—」、中・四国アメリカ学会シンポジウム、県立広島大学、2006. 11. 25.
- ② 森 あおい: 「パリ博覧会 (1900) とモリスンのルーヴルでの特別展 (2006) を通してみるアフリカン・アメリカンの『プロGRESS』」、黒人研究の会 5 月例会シンポジウム、キャンパスプラザ京都、2007. 5. 19.
- ③ Aoi Mori: “Foreigner’s Home” and Re-figuring Modernism,” The Fifth Toni Morrison Society Conference, Charleston, SC, (アメリカ合衆国サウスカロライナ州チャールストン) 2008. 7. 24-27.
- ④ 森 あおい: 「トニ・モリスンの『パラダイス』に見る歴史の再構築と芸術性」、日本英文学会九州支部大会シンポジウム、福岡大学、2008. 10. 25.
- ⑤ 森 あおい: 「トニ・モリスンの『パラダイス』(1998) に見る人種と階級」、東北英文学会 2008 年度大会シンポジウム、東北学院大学、2008. 11. 24.

[図書] (計3件)

- ① 森 あおい: 『二〇世紀女性文学を学ぶ人のために』、(共同執筆)、「ネグリチュード (黒人精神) と黒人女性作家の意識——ナルダル姉妹からトニ・モリスンへ」、世界思想社、2007、58-72.
- ② 森 あおい: 『ハーストンと娘たち: 点と線・見えざるものの顕在化』、(共同執筆)、「闘う女性の系譜」、南雲堂フェニックス、2007、14-30.
- ③ 森 あおい: 『トニ・モリスン「パラダイス」を読む』、(単著)、彩流社、2009、273pp.

[その他]

書評

Aoi Mori: “Andrea O’ Reilly. *Toni Morrison and Motherhood: A Politics of the Heart*.” *African American Review* 40.1 (2006): 177-180.

新聞記事

森 あおい: 「『外国人』解放する芸術」、『朝日新聞』、夕刊 文化欄 (西日本版)、2007. 8. 24.

## 6. 研究組織

- (1) 研究代表者: 森 あおい (MORI AOI)  
広島女学院大学・文学部英米言語文化学科・教授  
研究者番号: 50299286